平成 30 年度　板橋区青少年問題協議会　第二回専門部会

開催日時　　平成 31 年 3 月 19 日（火）　午後 6 時 30 分～
開催場所　　板橋区役所南館 6 階　教育支援センター研修室

出　　席　　者

東京家政大学人文学部教授	平戸ルリ子
法政大学キャリアデザイン学部教授	児美川孝一郎
教育委員	松澤智昭
区立中学校校長会	関　実
都立板橋高等学校校長	川口元三
青少年委員会副会長	川口茂好
民生・児童委員協議会 主任児童委員部会長	島村恵子
NPO 法人青少年自立援助センター	山本依里子
児童養護施設まつば園園長	鈴木敏郎
フリースクール@なります代表	久保正敏
公募委員(18 歳以上～39 歳)	小川弘平
地域教育力担当部長	松田玲子

出席職員（幹事）

指導室長	門野吉保
大原生涯学習センター所長	的野信一

オブザーバー

都立北豊島工業高等学校校長	中里真一
東京都教育庁地域教育支援部主任社会教育主事	梶野光信
教育支援センター所長	新井陽子
成増生涯学習センター所長	齋藤真哉
東京大学大学院教育学研究科生涯学習基盤経営コース・成増生涯学習センター社会教育指導員	大山宏

【開会】
・開会挨拶
・資料確認

【議事】　Bグループ討議

松田委員（地域教育力担当部長）　本日は、現場を持たれている方も多くいらっしゃいます。社会との接点の見つけ方や連携の取り方について等、日々感じられることがあるのではないかと思いますので、具体的な解決策や取組み等について、ご意見を出していただければと思います。まずは都立高校の校長先生方から何かございますでしょうか。

中里校長（北豊島工業高等学校校長）　本校では1年生の間で40人、3年間で見ると50人の生徒が退学します。学校を辞めていく生徒の多くが生活習慣に問題があり、まずは家庭で朝起こして、朝食をしっかり食べさせて、ちゃんと送り出すということからお願いしないといけないと感じていますが、それさえも難しい家庭があるというのが現状です。もう一つは、発達障害等が中途退学の原因である生徒もいるため、来年度からユースソーシャルワーカー(以下、ＹＳＷ)につなげて支援体制の拡充を図っていこうとしています。

全日制では、ここ10年、20年の生徒の変化に先生方がついていけていないという問題もあります。保護者から補講･補習補修の徹底を希望する声もありますが、先生方にも限界があるため、補講･補習体制については話合いを重ねる必要があります。一方、定時制では支援を要する生徒や外国籍の生徒への受入れ体制が構築されているので、定時制高校の先生たちの方がそういった生徒の指導に慣れています。ただ、これは定時制高校の方が先生一人に対する、生徒数が少ないといった数的な差も大きいということを感じています。

川口委員（板橋高等学校校長）　本校が抱える課題として受験に合格して、入学してきたはずの生徒が学校から離れていってしまうということが挙げられます。また、今の時期に成績会議がありますが、ある程度の単位を取得していないと進級･卒業ができないため、そこが一つのハードルとなってきます。この時期に進級･卒業できない場合、本校でも二桁近くの生徒が転学していきます。

入試の際に生徒の情報が中学校から上がってこないのがほとんどで、中学校時代に欠席日数が多い場合は自己申告書を提出できます。ただ、自己申告書からも問題が見えてこない生徒もいるため、中学校の先生も生徒それぞれの情報を上げることは大変だと思いますが、小学校から中学校の連携と同じ様に中学校から高校に向けての連携が必要だと思います。中には児童相談所

絡みの案件に関わってくる生徒もいるため、早期のケアと継続的な小･中･高の連携体制を密に行っていくことが重要だということを提案させていただきたいです。

松田委員
(地域教育力担当部長)
今のところ、そういうシステムはないのでしょうか。

川口委員
(板橋高等学校校長)
情報提供をもらえる学校が無いわけではないが、児童相談所からの情報提供の方が早いです。

中里委員
(北豊島工業高等学校校長)
本校の先生が区内の中学に出向いて情報を得ようと動き出しました、北豊島工業高校だからと門前払いせずに話を聞いてほしいです。中学校の先生方が忙しいとは思いますが、区の教育委員会の方から高校の先生が来たら話を聞いてもらえないかと働きかけてもらえるだけで、高校側としては教員を送り出しやすいです。

川口委員
(板橋高等学校校長)
中学校側からも高校側からも情報を求めていかないといけないと感じています。きっかけさえ得られれば、早急に連携は密になっていくと思います。そういったところが次年度に向けての課題だと思っております。

中里校長
(北豊島工業高等学校校長)
事前に生徒の情報が入っていれば、クラス編成のバランスを今よりも上手く調整することができます。

川口委員
(板橋高等学校校長)
あとは人間関係、本校は一つの中学校から二桁の生徒が進学してくることも珍しくないため、事前に中学校からの情報があると生徒の人間関係についての配慮が可能になります。

中里校長
(北豊島工業高等学校校長)
生徒の発達障害等に関して事前に知れていれば、ＹＳＷやスクールカウンセラーのフォローをつけ柔軟に対応することが可能です。

松田委員
(地域教育力担当部長)
ありがとうございました。
支援に入られている団体の方はいかがでしょうか？

山本委員
(青少年自立援助センター)
まなブースには中学３年生の夏休み前の面談時にこのままだと行くところが無いと指摘を受け、慌てて駆け込んでくる子が多いです。前回もお話しさせていただきましたが、高校生にはなりたいので、本人も保護者も短絡的に進学先を選ぶ傾向があります。結果、合格しても学校が合わない、なじめないというケースに陥ってしまいます。頑張って高校に受かろうとするわけで

はなく、レベルを落としてでも確実に合格できるところを選択し、受験を手早く終わらせようとする子が多いです。保護者セミナーの中でも卒業を前提とした、学校選びの大切さを訴えかけています。ただ、本当に来てほしい保護者と子どもが来てくれないため、中学１、２年生からの情報や考える機会がもっと積極的にあればいいと思います。

家庭環境に関すると、不登校の子をもつ保護者は、情報収集に熱心で我々の取組みにも協力的です。一方で、成績が著しく低い子や、親子の関係が悪い家庭の保護者は協力的ではなく、そういった家庭の子どもたちは中途退学のリスクも高いです。

良い学校選びの機会が既にあるのかも知れませんが、それが届いてないのはもったいないといつも思います。

松田部長
(地域教育力担当部長)

中学校では職場体験や保護者を交えての面談もやっているのですけどね。

中里校長
(北豊島工業高等学校校長)

まず、中退する子どもは圧倒的に欠席が多いです。崩れきった生活リズムを高校で改善することは非常に難しく、一番効果的なのは働かせて自分で稼ぐという感覚を刷り込ませることです。そういった改善点が学校ではないというところが工業高校のジレンマとしてあります。

久保委員
(フリースクールゆうき代表)

小･中学校時代に不登校を経験し、当フリースクールから高校進学した子で辞めるといった子はほとんどいません。これは、フリースクールに通うために規則正しい生活が身につくからだと考えられます。また、進路に関しては、世間体や保護者の期待に応えようと、本意ではないところで進路選択をしようとする子もいるため、早い段階で本人の希望を引き出すことが重要だと感じています。そういったことに関して、本人の世間体や保護者の期待とは別のところにある本心にどれだけ寄り添えるかということが大切であり、そういう部分に関しても相談できる場所があると良いと思います。

的野幹事
(大原生涯学習センター所長)

保護者と本人の希望のズレについては非常に考えさせられます。前回の中里校長先生の話を聞いて、「北豊島工業高校の定時制が手厚い支援を行っているみたいだよ」と利用者に勧め、本人もその気になっていたが、保護者が定時制への進学なら高校には通わせられないと言って、進学を断念したケースがありました。せっかく改善に向かおうとしていたところに、保護者と本人の進路希望のズレから問題が生じるということを経験しました。現在、大原生涯学習センターは居場所づくりとして機能しているが、保護者への働きかけや整合を取れるような場所になればと思いました。

中里校長
(北豊島工業高等学校校長)

保護者の中には、定時制高校に対する拒否感を持っている方は珍しくないです。今、ほとんどの定時制高校は年間で、１人か２人しかやめません。自分の将来がわからない、高校を選べないという生徒たちには「３年間時間を買いに行くと思いなさい」と声をかけています。

また、転学と中退は大きく異なるため、前の学校で失敗し、一度、高校を中途退学しそうになった場合は転学を利用して、次の高校でしっかり卒業できるなら何も問題は無いというメッセージを本人にも、保護者にも流していく必要があると考えます。

的野幹事
(大原生涯学習センター所長)

小･中学校でのキャリア教育の多くが格好いい視点からアプローチされているが、昼間に働いて、夜に高等学校に行くことも応援してあげるよという異なる視点からのアプローチもセッティングすれば、定時制高校への不安感も薄れ、進路選択の一つに繋がるのではないかと考えたりします。

松田委員
(地域教育力担当部長)

鈴木委員は児童養護施設で子どもの生活をまるまる見ていてどう感じますでしょうか。

鈴木委員
(児童養護施設ちっば園園長)

施設にやってくる多くの子どもが親からの虐待を経験し、入所してきていることを踏まえると、大人への信頼が無くなっています。また、自分に対する自尊感情も低く、自分なんて生きていてもしょうがないと平気で言ったりします。高校入学に関して言えば職員と一緒に学校を見て回って、ここだったら通えるじゃないかという学校は、大体、通信制高校になります。それでも、週一の通学でさえ通えなくなってしまう子がいるという現状です。

一方で、携帯電話代等を自身で支払いをしなければならないので、アルバイトに関しては比較的長く続けることができる子が多いです。その後の子どもたちの社会生活をどう支えていくかというのが大きな課題になっている中で、アルバイトができるという力を、働くという自立の方向にどう向けていくか、自分もやればできる、やりたいことがあるという部分をどう育てていくかに職員は日々悩みながら取組んでいるという実態であります。

中里校長
(北豊島工業高等学校校長)

中途退学問題に関しては入り口の段階でボタンの掛違いがある気がします。北区を例に上げると北区進学フェアという学校説明会を行っています。板橋でこれを応用して、不登校や不登校気味、学力に自身のない生徒へ向けた進路選びのための学校説明会を行ってもいいのではないでしょうか。そういう生徒たちは学校説明会にはなかなかいかないから、数人でもいいので入り口で間違わないためにやっても良いのではないかと感じています。

松田委員
(地域教育力担当部長)

私もぜひやりたいと思っていました。いろいろ悩んだけれども、こういうかたちで進路選択して、今が充実しているという体験者を集めて、定時制高校というのは、実際はこういうとこだよというのを不登校や不登校気味の生徒に話す機会を設けられたらなと思います。不登校や不登校気味の子どもがそういう話を聞いて自分を大切にして進路を選べるきっかけとしたり、自分１人ではなかなか言い出せないけど他にも悩んでいる人がいるということを知って欲しいです。

中里先生
(北豊島工業高等学校校長)

１校１校に先生が行くより、１カ所で開催し、そこに行けば様々なサポート団体や高校１０校の話が聞ける方が得られるとなればやる価値はあると思います。

的野所長
(大原生涯学習センター所長)

定時制高校が今はそんなに悪くない、むしろ良いということを聞く機会があったら子どもたちの進学先に、ちゃんと挙がってくるようになるのではないでしょうか。子どもたちはよく影響されるから、ちょっと上の先輩がそういうことを言ってくれたら状況がだいぶ違ってくるのではないかと感じました。

山本委員
(青少年自立援助センター)

定時制高校に通いだして、最初はネガティブなイメージを持っていたが、子どもがちゃんと学校に通うようになった、卒業が見えてきた等、状況が良い方向に変わってきているということを子どもは子ども同士で、保護者は保護者同士で情報共有できる機会があると良いのではないでしょうか。

事例紹介として、中学時代から不登校だった子がせっかく合格した桐ヶ丘高校を辞退しました。何が不満だったのかというと面接の際に「高校にはちゃんと通えそうですか」と聞かれたことが本人的にはすごく嫌だった様で、中途退学に対し理解のある高校を選んで受けて合格したにもかかわらず辞退した。そういった高校の選び方なので、早い段階で何のために高校に行くのか、この高校はどういう方針なのかということを理解する必要があります。先ほどもあったようにある一定の層の子どものための説明会があるとどれだけ集まるかわからないですが、やってみる価値はあるのではないかと思いました。

中里校長
(北豊島工業高等学校校長)

東京都で中途退学していく生徒に向けてチラシ(自立支援チームだったらカード)を配布はしているが、３次募集を知らない保護者や、定時制高校を勘違いしていたりということがあるので、都立高校もだいぶ間口を広げて生徒の募集をしていることから、選択肢についての丁寧な冊子があるといいのかなとも思います。

川口委員
（板橋高等学校校長）

都立高校は都立離れの加速に対する対応と入学してきた生徒の育成に追われています。都立高校の合同説明会には定時制高校のコーナーがありまして、そこで定時制高校の情報を得ることはできます。板橋区は定時制高校がそれなりにあるため、先ほどから案が出ていますが、近隣の桐ヶ丘高校、稔ヶ丘高校を加えた定時制高校だけの説明会をやっても良いのではないかと思うところもあります。定時制高校への誤解を少しでも持っている人がそういうところに行くと定時制高校の強みを知ることができるというのは大きいメリットがあります。

松田部長
（地域教育力担当部長）

全体に向けての進路説明会ではなく、一定層に向けての説明会をすると効果があるのではないか、悩んでいるところにこういう進路があるという提案ができると良いですね。

川口委員
（板橋高等学校校長）

今の定時制高校は本当に丁寧な学校が多いです。情報発信によって、誤解や認識不足を解消していくことに意味があると思います。

久保委員
（フリースクールもりもりすず代表）

学校説明会という開催の仕方だと、行きづらいと感じる子もいるかもしれないので、その前段階としての学校の選び方、私立の通信制や高等学校卒業程度認定試験等の様々な進路の選択肢を知る機会としての開催があればいいと思います。そこで、進路の選び方や進路の情報提供があるといいと感じました。学校を決めるためとなるとハードルは高くなるので、もっとハードルを低く一緒に考えて選びませんかというスタンスで、本人のニーズに合うような進路の提案や総合的な情報提供等できることをやれるといいんじゃないか思います。

松田部長
（地域教育力担当部長）

ありがとうございました。
梶野さんからは何かございますでしょうか。

梶　野　氏
（教育庁主任社会教育主事）

では、Ｂグループの資料について、事務局より説明お願いいたします。

五　　味
（青少年係）

前回、足立区と練馬区が東京都と連携をとって、中途退学問題に取組んでいるというお話を伺いましたので、２区の取組みについて調べました。
資料①は足立区で「足立とつなぐ未来プロジェクト」の重点取組みとして、区の様々なセクションで中途退学問題に取組んでいるということがわかるのではと資料として挙げさせていただきました。
続いて、練馬区では中学三年生対象の学習支援事業に絡めて、前年度の利用者に進学後の困り感等についてのアンケートを実施し、必要であればＹＳ

Wの支援につなげることが可能な体制を構築していました。板橋区でまず都と連携してできることについて考えた結果、練馬区の様に学習支援事業に結びつけ結びつけていくのが、最初の一歩ではないかというところから、練馬区の担当係長よりアンケート内容をいただき、資料②として挙げさせていただきました。

梶　野　氏
（板橋青少年社会生活支援センター）

ありがとうございました。ここまでお話を伺っていると、高校入学前の入り口の設定の仕方に関して、様々なアイディアが出てきたと感じました。中学･高校の情報連携は明らかに重要であり、先生同士で情報を共有することはもちろん、生徒にとって入る学校がどういう学校なのかということをわかりやすく伝えるということも必要なのかなと思います。

実際、不本意入学によって入学する生徒は少なからず存在し、高校によっては多くの子がそういう入り方をしてきてしまう現状に対して、どんなアプローチをしていくかということが１つの大きな課題ではないかと感じながら話を伺っていました。

中途退学問題に３年間取組んできて、もう一度やり直せる生徒とそうでない生徒との違いは、「主体的な学び」になっているか、本人のやる気スイッチが入るか入らないかという部分、どうやったらその子が主体的に頑張ろうという気持ちになれるかという動機付けの違いにあることが見えてきました。

また、課題がある生徒を保護者との関係性という観点から見ると、過干渉と放任にくっきり分かれています。過干渉の保護者の場合は、その芽を摘んでしまうケースが多く、生活習慣がついていないというパターンは放任主義が多いです。

生活習慣が身に付いていない生徒の場合は、大人の良いモデルと出会うことによって良い方向へ変わるのが早い気がします。一方で、保護者が子どもの生活を支配しているといった、過干渉な保護者を持つ子どもは自分で逆境を跳ね返していこうとする気持ちになかなかならないため、そういう子たちの支援はかなり難しいです。

自立支援チームでは今年度34校、来年度は39校を継続派遣校として、ＹＳＷを定期的に派遣することになっています。来年度からは北豊島工業高校も支援させていただくことになりました。高校の中でやれる策は資料の②から⑤と私の中では考えています。入学してから何ができるかという、１つのポイントととしては、中里先生とも話しましたが、学校が「主たる生活の場」であるとその子が思えるかというのが重要な要素です。学校に居場所がある、学校が面白い、授業が面白いというところもあるのではないかと思います。

高校を辞めさせないようにと努力する中でも、やはりドロップアウトしてしまう生徒は出てくるわけでして、工業高校などは特に不本意入学が多いた

め、学校の中で食い止める策がダメならその次の策を考えなければいけないというところで考え出したのが、NPO法人と連携をとった「学びのセーフティーネット」という事業になります。これまでの３年間、高校中退した子の学び直しについて事業化をしてきたのですが、高校改革の実施計画が新たにリニューアルされたことにより事業のスキームを見直そうということで、来年度から実施するものになります。これまでの事業では高校を中途退学した後にメインを置いていましたが、今回は通信制高校の生徒で年間24日か25日程度しかスクーリングがないため、平日を上手く過ごさせる機会を作れないかというところから、都立高校不登校の状態でいるのだけど何とか学校復帰を目指したい生徒を受け入れる場所を作っていこうと考えています。

通信制高校の生徒４分の３が転編入、一度他の学校に入って、通信制の高校に入り直し、一回でもレポートを出したことがある生徒が1,100人程います。こうした本人がやる気を見せた生徒に何とか次のステップに進めるように下から支える様な仕組みを作りたいと考えました。拠点では交流居場所的機能や社会体験を盛り込むような形の授業にリニューアルさせようと考えています。定員を20名だったのが70名に、週３回から週５回の実験的に３カ所の開催にして、学校という枠の中で何とかやり直せる支援がＹＳＷの仕組み＋αでできないかというところで実施していきたいところです。

もう一点、足立区以外に去年の夏、８月に葛飾区、今年の２月に江戸川区から連絡を受け、中途退学後やそもそも高校に進学しなかった子を対象とした学習から生活までを含めた支援を都立高校も含めて連携したいという話をいただきました。それぞれの場所で高校生等を対象とした支援の場の整備を考えていたことと、東部地区の退学した子たちには学びの場について選択肢が少ないことから、都が北千住に新設するものと、それぞれの区が持つ学びの場について、区を超えての利用を東部で連携をしようと、３区間で協議機関を設けて

都立高校を巻き込みながら、学校外の学びの場を作っていけないかという話が広がってきました。板橋区でも私どもとの連携を考えていただけたらと思いまして、紹介させていただきました。

松田部長（地域教育力担当部長）　ありがとうございました。
時間が迫ってきましたが、他に何かございますでしょうか。

中里校長（北豊島工業高等学校校長）　児美川先生、保護者に対してはどういう風に言えばいいですか。

児美川委員（法政大学教授）　それはどこの高校に行っても聞かれることなのですよ。先生と生徒で話がついたのに最終的に保護者が納得しないということが背景にあるようです。

中里校長
(北豊島工業高等学校校長)

保護者が子どもの将来について、先に諦めていることが多いです。
諦めるのではなくて、子どもの将来について次の道を考えるべきだと思うのですが。

児美川委員
(法政大学教授)

何もしないでいたら、何も変わらないですものね。

松田委員
(地域教育力担当部長)

予定していた時間を過ぎてしまいましたので、討議の方はこれくらいにさせていただき、議事２「各グループ討議内容についての発表意見交換」に入ります。それではＡグループから発表をお願いいたします。

【Ａグループ　発表】

松田委員
(地域教育力担当部長)

ありがとうございます。
続きまして、Ｂグループお願いいたします。

五　味
(青少年係)

高校の校長先生から、中学から高校へ進学する段階で、個人情報保護の壁もあるが前もって生徒の情報についての連携を取れたらという意見がありました。また、区の教育委員会には高校の先生が中学校に来たら話を聞いてもらえる体制を築いてもらえたらという意見がありました。支援に当たっている関係団体の方からは、子どもたちの様子について、頑張って高校に受かるよりもレベルを落としてでも合格する学校を選ぶ子たちが多く、またそういう子たちは高校に継続して通うことがなかなか難しいというご意見がありました。小･中学校の段階で身に付いた生活リズムの乱れが大きく影響するといったご意見もあり、早い段階での対応が大切じゃないかと意見がありました。また、保護者と子どもの希望のズレが見られるという意見がありました。

中学校から高校に上がる段階での入り口の掛け違いの話もあり、一定のレベルの子たちを対象とした、進学説明会があるといいのではないかという意見もありました。保護者が定時制高校へネガティブなイメージを持っているという話も出ました。

都の方では、頑張れる子とそうでない子の違いは主体的になれるかなれないか、やる気スイッチがあるかどうかというところで、学校が「主たる生活の場」になっているかどうかの基準から、前回の自立支援チームの他にも「学びのセイフティーネット事業」として学び直しの支援についても、４月から準備しています。自立支援チームでは複数区と都の連携についての説明がありました。板橋区では隣接する練馬区が支援に当たっていることから、情報交換や連携を得て支援の手立てを整えて行けたらというところです。

児美川委員
(法政大学教授)

中途退学問題を考える場合、中途退学リスクに関しては二局面がありまして、一つは高校入学前の入り方のところで、中学校との連携も含めて考えなくてはいけないということと、もう一つは、入学後も生徒の通い続ける力を育み続けることの大切さ、そこには学力面もあるし人間関係もあるでしょうけど、議論の中では生活習慣の乱れが大きく影響するということでした。いずれにしても通い続ける力をどういう支援をできるかというのが二つめで、大きな二局面を意識しないといけないという議論がなされました。

入り口のところに関しては、安易な学校選択や保護者と本人の希望のギャップがあるということでした。アイディアとしては新しいかたちの進路説明会といったものができないかというのがありました。特に良いなと感じたのは、中学生から見て、ちょっと上の先輩の高校生が語るような場面があるとか、保護者からすると、ちょっと先にわが子を高校に行かせた他の保護者から、この学校でよかったよという情報を得られるような、安心感を得ることができる機会を創出しようというものです。地域レベルの取組みとしてできることだと思います。他にも、入り口のところに関しては、生徒を送り出す側の中学校と、受け入れる側の高校で、中・高の連携についてきちんと体制を組んでいく必要があります。そこに、個人情報保護の壁もありますが、学説的に見ても個人情報に関して教育サポートに係る場合には、集団的守秘義務という言葉がありまして、中・高校間でこの生徒の支援のためという前提があれば情報共有をするのは当たり前の話でそれを外に保ち出したりするのはもってのほかですが、そういう事はできるのではないかと思います。そこで変な風にたじろいでいる必要は無いのではないかと感じました。

入り口の所にしても、通い続ける力にしても、高校に行く目的を生徒がどう持てるか、何のために自分が高校に行くのか、あるいは通い続けるためには努力も必要でありますが、それは何を目的に高校に通っているのかという、目当てを持ってもらうことが大切です。月並みな言い方になりますがキャリア教育において、大事なのは中学校の時に、なぜ高校に通うのかっていうところを「周りも通うから」で終わらせるのではなく、何かをつかむためで、キャリア教育はきらびやかなところばかりじゃなくて、やはり自分の人生だから自分で決めた方が良いし、自分で決めるというのはすごくいいことで、楽しいし、やれたという実感を自分が掴めることはすごくいいことだということを伝えられるものにすることです。次につながる、地に足がついたキャリア教育的な営みを中学校でもやらなきゃいけないし、高校でもそういうことをやることで、つまずきとか人間関係でしんどくなったりすることもあるでしょうけど、だけど学校を続けていこうとする、本人の内側からくる力を伸ばしていけるというのはすごく大事だと思います。やり様としては、中学校からの送り方においても、高校で受け止めた後の過させ方についても多様なやり方があるように思います。その次に、少し外れますが進路変更についてもちょっと話が出ていて、

中途退学が絶対悪かと言われるとそうとも限らなく、どこにも居場所がなくなってしまうのはまずいですが、前の高校ではやっていけなかったけれど、次の高校では頑張れているといったことを、もう少し積極的に考えてもいいと思います。そういう「次」を見つけるための情報をどこで得られるか、誰が相談に乗ってくれるかといった体制を作ることを含めて、進路変更は中途退学問題というところに引き付けるだけでなく、違うかたちでのキャリア選択だと思っていいのではないだろうかと思います。

最後に、やや大胆に言うとなんですが、こういうことが問題になるということは、日本の今の学校が固すぎるのではないかということを如実に表しているのではないかと思います。なぜ、こんなに不登校の中学生がいるのかといったところから、中途退学リスクにつながっているわけですよね。定時制高校のいい面があるのだけども、保護者からの抵抗感があるとか、中学校からストレートで通信制高校を選ぶ子どもがどんどん増えていますが、なんで通信制が魅力的に見えるかというと普通の学校が生徒たちにとって居心地が悪い、固すぎると思われているからではないでしょうか。東京都でもチャレンジスクールやエンカレッジスクールといった学校をつくっていますが、普通の普通高校の枠が生徒にとってゆるやかでしなやかになっていけばと思います。いわゆる学校型の活動だけではなくて、様々な社会体験を余裕をもってできる。高校生になったら、社会での教育の一環としてアルバイトを取り入れるといったこともありうるし、生活リズムを整える時に労働の力、社会体験の力は大きい助けになります。自分が学び続けていく目当てをつかむためにも学校の勉強はもちろん大切ですけれど、そういった社会体験を通してつかめることもあるのではないかと思います。そういった意味で、単にゆるくするということではなくて、こうした学校の在り方が広がっていくことが大切だと思います。そうやって、自分のやる気や目当てが見つかった子は高校に行ってもきっと続くでしょうし、高校側も受け止めてから子どもの伸ばす部分に働きかけが出来るようになると思います。これから先の大きな課題としてはこんなことも考えてもいいのではないかと思います。

松田委員
(地域教育力担当部長)

ありがとうございます。

お時間迫ってはおりますが、少し質疑応答の時間を取りたいと思いますが、いかがでしょうか。

松澤委員
(地域教育力担当部長)

Bグループの方から、「通い続ける力」とありましたが、小・中学校の段階でそういった力を伸ばすためにはどういったことが必要でしょうか。

児美川委員
(法政大学教授)

目当てといった部分で、何のためにというところがある子はそこが軸になって、頑張れるというところがあると思います。そこが無いと、行かなくちゃと

いう義務感だけになってしまい、どうしても続かないだろうと思うのです。本人の中のスイッチというかエンジンみたいなものが、どう構築されて作動するかということが一番大事なのだと思います。

松田委員
(地域教育力担当部長)

ありがとうございました。他にはいかがでしょうか。

島村委員
(民生・児童委員連合会 主任児童委員部会長)

昨年４月に高校に進学したのに、すぐに学校をやめてしまった生徒が、数人います。生徒たちが転学という仕組みがあり、高校は転学できるということを知らないことも問題だと思います。子どもたちは高校を退学しても何とかなると思っています。実は就労の際に、高校卒業というのは一つのボーダーになります。就労にうまく結びつかなかった際に、就労支援センターに協力を求めようとすると、高校卒業という学歴が一つのポイントとなり、高校中退では就労支援センターの協力は厳しいです。高校を退学するということを、中学校時代の不登校と感覚的に一緒にとらえている子どもが多いです。各地域に主任児童委員がいますが、中学校を卒業した後の生徒の情報がほぼ入ってきません。実はもう高校を辞めてしまったという段階で情報があっても、そこから支援に結びつける手立てがありません。生徒の過去に、主任児童委員や民生児童委員が支援をしていたお子さんが高校進学した際は、高校の先生方は遠慮なく私たちに連絡をただきたいと思います。高校を辞めてしまう前に、私たちにもう一度、その生徒の人生を一緒に考えさせていただければと思います。

中里校長
(北豊島工業高校校長)

今の件は非常に耳が痛いです。中途退学者を出すというのは学校としても後ろめたいです。生徒も辞めてしまったという後ろめたさから、中学校に連絡しないという実情もあると思います。児美川先生からもありましたが、学校がもう少しゆるやかで、しなやかであればという話がありましたけれども、世の中が転職という考え方にだいぶ寛容になってきたのと同じように中途退学や転学ということに対して、世の中が寛容になればいいかなと思います。先ほど、グループワークの中でもいいましたが、高校卒業の資格を得るために３年間であり、４年間であり必要なのですけども、それは入学が北豊島工業高校で卒業が私学のＮ学院であってもいいと思います。そういったことを、学校側も親もしっかり受け止めることで辞めることが悪ではないということをしっかりと中学校に伝える、一年後の生徒の状況について中学校と情報共有をし、生徒たちの次のステップを考えていけたらと思います。

これまで高校側からのアプローチが乏しかったのは、あの学校に生徒を送り出してもすぐに辞めさせられてしまうのではないかと、中学校側に思われてしまうんじゃないかという後ろめたさがあります。生徒が辞めてしまうと

しても、そこまで一生懸命指導はしたのだけれども残念ながらと受け止めてもらえるような関係づくりをしていければと思います。

もう一つ、不登校問題に関しては、20年間ほど定時制高校の教員をしていたものですから、不登校の生徒を多く見てきました。生徒にも言っていましたが、保護者によく言っていたのは「環境を変えれば生徒は劇的に変わる」ということです。実際に小学校３年生から一日も学校に行かなかった子が高校３年間は皆勤賞だったという生徒を何人もみてきました。その生徒たちにとって、環境を変えるというのは定時制高校だったからということが影響したからかもしれません。今後も、「環境を変えれば生徒は劇的に変わる」ということを保護者にも生徒にも上手く伝えていけたらと思っています。

松田委員
(地域教育力担当部長)

ありがとうございました。

話題が尽きないのですけれども、時間の関係でここまでとさせていただきます。

それでは、議事３その他について、事務局よりお願いいたします。

事 務 局

・第一回専門部会議事録について

松田委員
(地域教育力担当部長)

最後に、来年度の青少年問題協議会でございますが、年度最初の全体会は６月25日(火)又は27日(木)で予定しております。委員の皆様の委嘱期間は２年となっております。団体によっては委員がお変わりになる場合もあるかと思いますが、来年度も引き続きよろしくお願いいたします。

それでは、これをもちまして本日の会議は終了させていただきます。ありがとうございました。